エッセーコンテスト「七夕の思い出大賞」

大賞 拝啓、彦星様

中野 彩さん（平塚市・36歳）

彦星様に出逢ったのは学生の頃である。地元のお好み焼屋でアルバイトをしていた私は、もてなす側の七夕祭に奮闘していた。早朝から仕込みをし、呼び込みや外でのかき氷売り。買い出しに出れば観光のお客さんに頼まれての道案内。全てがやりがいに満ち、七夕飾りの様にキラキラと輝いていた。

陽が傾く頃、親子連れや恋人でにぎわう店に、ふらりと現れたのが彦星様である。涼しげな生成りの浴衣にカンカン帽とステッキ、八十代と思われる老紳士だ。

「七夕祭の時、毎年必ず来て下さるんだよ。」と、店長が教えてくれた。カウンターで小さなグラスにビールを一杯、おつまみを少し召し上がって、お土産のお好み焼をお持ちになって帰るのがきまりだという。楽しげなお客様の中、一人静かに店内の雰囲気を味わうと星の出る頃、私に「頑張っているね、また来年くるよ。」と声を掛け、人混みに消えていく。その姿はとても印象的だった。

それから毎年、時には中折れ帽だったり、浴衣の色を絽に変え、彦星様は現れた。幼い頃に亡くした祖父に会う様な、恋人を待つ様な、不思議な気持ちでその日を待ち侘びた。

二十代になると、仕事に人生に、つまずく事の多かった私は、七夕の仕事にもやりがいを見い出せなくなっていた。あまり上手に笑えずに、でも、いつもの様に彦星様をお送りしようと外に出ると、元気のない私に「七夕になると君の笑顔が浮かんでね。」と伝え、星と出店の明かりに消えて行ったのである。

それ以来、彦星様に逢う事は出来なかった。三十代になった今、転職し、仕事に、人生に懸命に生きている。七夕飾りが揺れる、その天の川の向こうから彦星様が現れる気がして目を凝らす。今なら毎日笑顔でいる事を伝えられると心に綴るのだ。「拝啓、彦星様。」

小学2年生の終わりに平塚に越して以来、欠かさず参加してきた七夕まつり。中でも今回の思い出は、「今を毎日後悔なく生きよう」と、私の生き方を変えてくれ、その方への感謝のメッセージでもあります。

第25回「七夕の思い出大賞」大賞発表

「湘南リビング新聞社」と「湘南ケーブルネットワーク」が、七夕に合わせて行っている「七夕の思い出大賞」。25回目を迎える今回も、心温まる七夕にまつわるエピソードをお寄せいただきありがとうございました。厳正なる審査の結果、見事に受賞した大賞・準大賞の合計3作品を紹介します。※エッセー表記は原文のまま

昨年の「七夕の思い出大賞」表彰式の様子

「第25回七夕の思い出大賞&創刊25周年記念七夕ぬり絵大賞」表彰式を七夕まつり会場で開催！

第25回を迎えた「七夕の思い出大賞」受賞者と、上記で紹介の「創刊25周年記念七夕ぬり絵大賞」の表彰式を行います。また、その様子を湘南ケーブルネットワークが生中継！　大勢の観覧と温かい拍手をお待ちしています。

▶日時　7/8(日)14:30～15:00
▶会場　見附台広場(平塚市見附町16-2)
　　七夕ステージ…地図は3面

【第25回七夕の思い出大賞】
主催／湘南リビング新聞社
　　湘南ケーブルネットワーク
後援／湘南ひらつか七夕まつり実行委員会
協賛／ラスカ平塚・フリーデン

エッセーコンテスト「七夕の思い出大賞」

準大賞 祖母の伝承、孫の継承

藤井惠子さん（藤沢市・60歳）

祖母は、節季ごとの行事を大切にした。冬至だ、夏至だと、その意味などを教えてくれて、それはそれで日々の暮らしにメリハリが出来て楽しかった。

私が中学生になった年の七夕の日、学校から帰ってくると、祖母が立派な笹を手に、着替える暇もなく、

「お帰り、早速やけど、笹につける飾りと短冊作るから、あんたもやりなさい」と、半ば命令口調で言った。

小学生の頃とは異なり、部活で、帰宅時間も遅く、塾に行く時間が迫っており、七夕のお飾りを作るくらいなら、おやつを食べてホットしたかった。七夕のお飾りなんて、勘弁してほしいというのが本音で、正直祖母がうるさく嫌だったけど、祖母はそんな私に頓着することもなく、早く早くとせっつき、

「時間がないからできないの」と突き放すように言った私に、

「じゃあ、お願い事だけでも短冊に書いて、笹につけて、それくらいはできるでしょう」という。その祖母の言葉で、益々、やりたくなくなった私の声は、きついものだった。

「短冊なんて、どうでもいいよ、おばあちゃん一人でやって」

「じゃあ、お願いだけ聞かせて。おばあちゃんが代わりに書いておくから、何色の短冊がいいかね」

「お願いは、おばあちゃんに黙ってもらうこと、うるさくしないでほしいってこと」と言い放つ私の目を悲しそうに見つめる祖母の顔も見ずに家を飛び出し、塾に向かった。

塾から帰ると、きれいに飾られた笹がベランダで風に揺れていた。

「もっとゆったりと過ごさせてやりたい」祖母の願いは、私のことだった。その短冊にちくりと私の胸が痛んだ。

そしてその日は、祖母の最後の七夕になった。毎年七夕の日が来ると、私の胸はちくりと痛む。そして、今年もまた、短冊を笹にぶらさげるのである。

中学生時代の私は、祖母の思いを感じられませんでしたが、今では、思春期を迎える孫娘や娘に、年中行事を伝えられるよう心掛けています。私たち年長者が伝統文化を伝承して、受け継いでいけたらと思います。

エッセーコンテスト「七夕の思い出大賞」

準大賞 七夕計画

藤田房江さん（東京都・64歳）

「今年も行きてえなあ」

七夕の時期が近づくと毎年、ひとりごとのように呟く父。94歳。

「一人で歩けないんだから、行ける訳ないじゃん！」と諌める母。89歳。

そんな会話の様子が、東京に暮らす私へ、妹からのメールで届きます。

両親は共に、平塚生まれの平塚育ち。高齢ながら二世帯住宅に、夫婦二人でどうにか自立して暮らしています。父は13年前に脳出血で倒れた後遺症で、歩行には介助が必要。一人での外出はままなりません。

さて、父の希望を何とか叶えてあげたいと、私と妹の相談が始まります。日程、お天気、車の停車場所、歩けるコース、休憩場所…、様々なシミュレーションをかけた七夕計画です。

迎える当日。妹運転の車を四つ角付近に停め、私と父が降り、杖をついて私の肩につかまり、ゆっくりゆっくりと竹飾りの下を歩き始めます。「昔はここ、人通れないくらい混んでたねー」「イカ焼きがいい匂いだったねー」「よくこの短冊を引っ張ったねー」など昔話をしながら…。そして頃合いをみて、妹がまた車でお出迎え。わずか50メートル、一時間足らずの行程です。それでも娘二人の連携プレーで、念願の七夕祭りを観ることができ、満面笑みの父です。

帰宅後は、屋台で買ったお土産を味見しながら「七夕に来た人の中で、じいさんは多分最高齢！！」と親子四人で大笑いします。

今年もまた、父がそわそわする季節が近づいてきます。長生きしてくれている両親と一緒に、共に思い出を語り合える湘南ひらつか七夕祭り。人混みは嫌い！と無関係を装う母も結局一緒に、家族揃って賑やかにセカ計画、今年も策定します。

平塚生まれ育ちの両親。特に父は七夕まつりに思い入れが深く、毎年楽しみにしています。東京に住む私は、両親と同居する妹の手伝いも兼ね、この期間になると帰省して、父と歩く七夕まつりを楽しみにしています。

※ 2018/6/30 号「リビング平塚・大磯・二宮」紙面掲載